

經濟論叢

第141卷 第6号

平井俊彦教授記念號

献 辞	尾崎芳治	
世論の觀念について	阪上孝	1
J. S. Mill が社会科学研究の 始源においたもの	山辺知紀	19
資本制商品の物神性の根拠について	梅沢直樹	43
レーニンの市場理論について	太田仁樹	62
ジョン・ミラーとフランス革命	田中秀夫	81
社会主義者の社会ダーウィニズム観	保住敏彦	100
ニューディールと民衆・序論	小林清一	119
フランス・プロテスタント封じ込め政策 (1610-1661)	木崎喜代治	138

平井俊彦 教授 略歴・著作目録

昭和63年6月

京都大學經濟學會

J. S. Mill が社会科学研究の始源においたもの

山 辺 知 紀

I ミルとコント

ミルは、1865年に『ウエストミンスター評論』誌上で、二度にわたってコントについての論文を発表している。すなわち、1865年4月の第83号に掲載された「オーギュスト・コントの実証哲学」と、同じく7月の84号に載った「後半生におけるコント氏の思想」がそれである¹⁾。たしかにミルの思想形成の中で、コントの影響を無視できないのは事実である。とくに、ミルの『論理学体系』第6部に現われる「逆の演繹法」は、ミルがコントの『実証哲学講義』から引き継いできたものであるのは、よく知られている²⁾。ミルは、かれの『論理学体系』のほぼ3分の2を書き上げた時点で、この『実証哲学講義』を読み、それに大いに刺激され、1841年11月にはコントに手紙を送り、コントから直接教えを乞いたい旨を伝えているほどである。そしてミルの『論理学体系』は1843年に完成・出版されている。二人の間での文通は、1847年5月まで約5年半継続していた。しかしやがて手紙での論争が始まり、それに加えて金銭的な問題もあって、この二人の関係は冷えてしまった。二人の間での意見の相違の中でも、両者の女性観が決定的に異なっていたことはよく取り上げられる。しかし、それほどには注目されていないにしても、この両者の間での実証的な思

1) この二つの論文 'The Cours de Philosophie Positive' と 'The Later Speculation of M. Comte' は、その年のうちに "Auguste Comte and Positivism" という題で一冊の本として出版された。私がここで利用しているのはトロン大学から出版されている "Collected Works of John Stuart Mill" の第10巻（以下では CW, X. と略記している）に収められたものである。なお邦訳としては、村井久二訳『コントと実証主義』（1978）を利用させていただいた。

2) ミル自身、その『自伝』の中で、「私が彼に負っている唯一の主要な概念は、逆の演繹法というそれである」と述べている。（CW, I, p. 219, 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』184ページ）

考様式に対する意見の相違は、決して疎かにされてはならない問題である。

ミルにしても、これは精神的危機からの脱出過程にあった1830年代から一貫して言えることだが、知識の進歩ということを歴史を見ていく際の最も重要な基準の一つとしていた³⁾。そしてこの知識の進歩ということの具体的な中身は、実証的知識の量的な拡大と普及を意味していたとも言える。だからミルは、コントのいわゆる三状態の法則については、大枠としてはそれを認めていた。神学的状態から形而上学的状態へ、そしてさらに実証的状态へと、人類の知識の状態が進歩してくるということについては、ミルも確かに大枠としては受け容れていた。しかし、ミルのコントの受容は、あくまでも大枠としての受容であって、厳密に見てみれば、実証的知に対する両者の理解には、無視できない相違点があったとも言えるだろう。

ミルのコントに対する批判は、先に触れた1865年の『ウェストミンスター評論』に掲載された論文が出るまでは、それほど明確な形では表明されてはいなかった。しかし、だからといってミルがコントに対して、その交際の初めからそれを全面的に受容していたとは、必ずしも言えない。ミル自身、『自伝』の中でも述べていることだが、まだ無名だった頃のコントを批判したりすることは、勿論そればかりではないだろうが、その欠陥だけでなく、コントの優れたところまでも否定することになりかねないという配慮が働いた、とも述べていた。確かにミルの『論理学体系』にしても、ここには実証的知の体系を完成させようという彼の明確な意図が働いていることは事実である。『論理学体系』の第6部「人倫科学の論理学」の書き出しは、「人倫科学の遅れは、適当に拡大され一般化された自然科学の方法を適用することによってのみ矯正されることができる」⁴⁾ という節をもって始められている。しかし、この『論理学体系』

3) ミルは、1836年に『ロンドン・ウェストミンスター評論』誌上に、「文明論」という評論を発表している。その中で彼は、財産の普及、知識の普及そして連帯の強化という三つの要素を、文明の進歩を考える上での指標にしていた。この立場は、ミルの中で、それ以降も常に保持されているものでもある。

4) CW, VIII, p. 833 (大関将一訳『論理学体系』VI, 3ページ)

が求めていた「適当に拡大され一般化された自然科学 (Physical Science) の方法」の人倫科学への適用ということも、それは単に実証的知の量的拡大のためだけに意図されていたのではなかった。

ミルが『論理学体系』のなかで真に意図していたことは、人倫科学・社会科学というものを、自然科学的方法によって獲得される実証的知の体系として描きだすと同時に、その限界をはっきりと規定することだといえる。しかも、このことは実証的知の体系の外にある領域に対する一定の予見を論理的に示していくことでもあった。存在するもの同志の間での単なる経験的關係を叙述するばかりではなく、それらの関係を「真理」として認めうるような関係を構想することこそが、ミルが求めていたものだった。

功利主義の伝統を引き継ぎ、先験的知にたいする経験的知の優越性を常に表明していたミルが、一見すると、そうした伝統的な考え方と矛盾するような方向を目指していたとするのは奇異に聞えるかもしれない。しかし、そもそもミルにとって、彼の精神的危機以降の思想的営為とは、功利主義的教条から自己を解放する試みと言っても言い過ぎではないだろう。経験的事実に依拠していれば、そこに必ず解答が与えられるとするような発想は、ミルにとってはすでに受け容れられるべきものではなくなっていた。少なくともミルにとっては、経験的事実の領域は、それを体系的に叙述すれば解答が与えられるようなものではなくなっていた。古い階級と新しい階級との対立、さらには新しい階級の内部での資本家と労働者との対立といった事実は、どこにもその解決の糸口を見い出せないように見えた。こうした事態の解決への糸口を、地主階級に依拠して考えると、あるいは資本家階級に依拠して考えるとかという発想は、ミルからは遙かに遠いものだった。しかし、だからといって、労働者階級に依拠してそれを考えるというわけでもなかった。少なくともミルにとっては、既成の階級に依存して事態の解決を目指すなどという立場は、無意味なものと思われていた。それゆえ彼は、彼の現実を、ただそれをあるがままに受け容れそれを体系化するのではなく、その現実に関がしかの「意味」を与え得るような方

法を模索せざるをえなかったのである⁵⁾。

ミルが、一方では実証的知への傾斜を強めていくと同時に、他方ではその知を支える何かあるものを求め続ける理由はここにあった。そしてここにおいてミルはコントと決定的に対立する。実際のコントがどうであるかは今は問わないとしても、少なくともミルからみたコントは、実証的知に全面的な信頼を置いているように見えた。コントにとっては、事実であるということが、常に同時に真理であるとされていた。ミルも、コントと同様、実証的知の領域を拡大させていくことに対しては、これを肯定している。しかし彼は、そうした実証的知を真理として証明することの方に、より大きな関心を持っていたと言える。たしかにコントは、実証的知の在り方については極めて論理的な思考様式を用意してはくれた。しかしミルの目から見る限り、コントがそれを真理として証明する手続きは、あまりにも欠陥をもったもののように思えたのだろう。ミルはこう言っている。「コントは、われわれに結論を探究する正しい方法を教えてくれた。しかしある結論に到達したとき、われわれはどのようにしてそれが真理であることを知ればよいのであろうか」⁶⁾。

ミルが、実証的知の始源にこだわり、また演繹法にこだわるのは、こうしたコントの実証的な思考様式を越えていくことを目指していたからだった。「コントは、始源 (commencement) についての如何なる現実的な知識も、われわれにとっては到達不可能なものであり、それを探究することはわれわれの知的能力の本質的な限界を越えるものであると考えていた。しかしながら、たとえばかれの観念進歩の三段階説を承認する人であっても、この点については彼に追随する必要はない。実証的思考様式は必ずしも超自然的なもの (the supernatural) を否定するものではない。それは、こうした問題をすべての事物の始源

5) ミルが、精神的危機以後、ベンサムを批判しコールリッジやカーライルに接近したことは周知のことだが、その背景には、こうした「意味」の模索というミルの強い意志が働いていたと考えられる。なお、これらについては、拙著『社会概念の成立と古典派経済学』（金沢大学経済学部研究叢書2）の第5章と第6章とにおいて述べてある。

6) *CW, X, p. 292* (『コントと実証主義』61ページ)

へと投げ返すだけである。もしも宇宙が始まりをもっていたのなら、その始まりとは、この場合のまさにその事情のゆえに、超自然的であった。すなわち自然の諸法則はそれら自身の起源を説明することはできないのである⁷⁾。勿論、このように述べたからといって、ミルがなにか神秘的な始源を前提にしていたなどということではない。そうではなくて、ミルが問題にしているのは、実証的知によって予めすべてが予知できなくても、後になってその後の経過を考慮に入れるなら、そこになんらかの始源を設定することが可能になり、それをもとにして全過程を演繹的に説明することは可能になるはずだということである。それゆえ、コントが事実の経過に対してのみ因果連関を設定し、しかもその原因と結果とを、単に先行現象 (antecedence) と帰結 (consequence) というように考えていることに対しては、これを単なる現象の法則あるいは経験的法則としてしりぞけざるをえなかったといえる⁸⁾。

ミルから見ると、コントの試みというのは、確かに事実の連関を明らかにし、それらを「体系的」に叙述するという意図に貫かれたものとしてあった。そのかぎりでは、ミルはコントを完全に認めていた。少なくともこのような試みこそが、経験的領域を科学的に解き明かす試みと言えし、これは、ミル自身『論理学体系』以来、それを試みているものでもあった。だからミルもこれについては、以下のようにコントを評価していた。「ある科学を実証化するという場合、コント氏が真に考えていた意味というのは、……それに究極的な科学的構成を与えるということであった。言い換えれば、種々の真理の中からそれらを結びつける環となる真理を発見あるいは証明し、その帰結を追究していくことである。天文学における引力の法則、生理学における組織の基本属性、さらに付け加えれば（コント氏は語ってはいないが）心理学における連合

7) CW, X, p. 270 (『コントと実証主義』20ページ)

8) フッサールは、彼の『論理学研究』を、ミルの『論理学体系』からの引用とそれへの敬意とをもって始めている。しかし、彼は、ミルたちの試みは、事象の連関をイデアの連関とみなすような心理主義であると批判していた (E. Fusserl, "Logische Untersuchungen," Erster Band 立松弘孝訳『論理学研究』I 参照)。こうしたフッサールからの批判については、ミルを全面的に擁護するのは難しいが、しかし、ミルが単純な経験主義者ではないことだけは確かである。

の法則がこのような真理である。この作業が完遂された暁には、科学は経験的時代を終了して、整序された整合的な理論体系に転化するのである。』⁹⁾

しかしながら、ミルは、経験的領域を科学的な理論体系へと叙述しようとするコントの試みは評価するものの、その方法に関して言うなら、それは、ミルが『論理学体系』以来持ち続けている社会科学の方法の確立という課題とは相容れないものであった。というのも、コントにあっては、彼の実証的知の対象とは常に具体的客体であり、それゆえ彼は人間の社会的生活にとって必要な道徳的機能や知的機能を叙述する際の原理を、生理学あるいはヨリ厳密には骨相学に求めていこうとしていた。これはミルにとっては絶対に容認できないことであった。「コント氏は、正当にそう呼ばれるに値する心理学的な観察を、言い換えれば、少なくともわれわれの知的活動に関する内的な意識 (internal consciousness) を、全く無効な手続きとして完全に否定している。彼は自己の系列において心理学にその場を提供せず、そしてそれについて語る時には、常に軽蔑の口調をもってしている。精神的現象の研究あるいは彼の言い方を借りれば道徳的・知的機能の研究は、コント氏の分類表においては生物学という部門のうちに位置づけられている。つまりそれは生理学の一分科にすぎないのである。』¹⁰⁾

すでに述べたように、ミルにとっての課題は、実証的知を実証的知としてただ体系化しさえすればいいというのではない。これは勿論必要条件ではあろうが、それだけでは十分ではない。今まで知り得ていないような「実証的」知の領域があるのではないか。骨相学や生理学のレヴエルの真理をもって、すべての実証的知を演繹的に構成してみせたとしても、そこに得られたものは所詮経験法則の体系にすぎない。ミルにとっての問題は、そこに構成された経験法則の体系が、果たして「真理」であるかどうかということであった。そしてミルが言うところの心理学とは、コント等が開いてくれた実証的知の領域を更に

9) CW, X, p. 290 (『コントと実証主義』58ページ)

10) CW, X, p. 296 (『コントと実証主義』68ページ)

一步踏み込んで、そこに「真理」への接近を可能にしてくれるはずのものであった。

ミルは、経験的領域での実証的知の体系を、それがいくら科学的に構成されていようと、それだけでは「真理」の体系とは認めていない。もしコントのようにただ実証的知の体系化あるいは科学化をのみ追究し、しかもそれを「真理」と主張するとしたら、それは再び新しいドグマへの危険性をはらむものと言えた。事実、ミルのコントについての第二論文「後半生におけるコント氏の思想」でのコントへの批判点は、基本的にはこの点に関わっていた¹¹⁾。ミルにとっては、「意味」の検証を忘れた実証的知の体系は、まさに傲慢な科学主義という新たな形而上学への道を歩むものとして捉えられていたと言ってもいい。先にも引用した「自然法則は自分自身の起源を説明することはできない」というミルの言葉も、基本的にはこの点と関わっている。ミルは、コント的な実証的知の体系を再度捉え直すことのできる領域を、少なくともその枠の外に求めていたということではある。そして彼にとって、心理学という領域こそは、存在と「意味」との緊張関係が維持されている領域でなければならなかった。だからミルの心理学というのは、実証的知の体系としての Physics に対するいわば Meta-physics (形而上学) として考えることができる。ではどのようにして、19世紀という科学の時代に Meta-physics が可能になるのだろうか。ミルの社会科学の方法を問題にしようとする際、以上のような問題を彼の『論理学体系』の中に追っていく必要がある。ミルがその『論理学体系』の中で、「性格学」とか「逆の演繹法」という言葉を用いざるをえなかった理由も、こうした問題との関連で理解されるべきものだろう。

11) ミルは、この第二論文において、コントが実証的学者あるいは実証的哲学者に、強固な精神的権力を与え、それによりきわめて専制主義的な社会システムを夢想していたことを、批判の中心に置いている。ミルから見ると、コントはあまりにも「体系化」や「完全な統一」を狂信的に信奉しているように思えたのだろう。

II 心理学から性格学

ミルは、社会科学は演繹科学でなければならないと度々強調していた。しかし、ここで演繹科学という場合、その演繹の始源はどのようにして与えられるのかという問題と、その始源はどのような質を持ったものなのかという問題とが生じてくる。ミルにとって、社会科学が対象とする社会的現象というのは、人間本性 (human nature) にその起源をもつところの現象と考えられている。「すべての社会現象は、外部の諸事情が人間の集団¹²⁾に対して作用を及ぼすことによって生ずる人間本性の現象である。それ故に、人間の思考・感情・行動の現象が、確定した法則に従うならば、社会の現象は、この法則の帰結である同じく確定した法則に従わないわけにはいかない¹³⁾」。ミルの中では、人間の思考・感情・行動といった現象と社会の現象とは、極めて緊密な関係を持つものと規定されていた。そしてこの両者の関係を支えていたのが、彼の言うところの「性格学」であり、人間の思考・感情・行動の法則性を追究していくものが心理学であった。だから彼にとっては、心理学というのは、社会科学の前に置かれねばならないものであった。

ミルが心理学というものによって、人間の思考・感情・行動を合法的なものとして捉えようとする場合、そこでの人間あるいは人間本性というものが問題になる。たしかに功利主義的原理によるならば、人は自分の幸福を追求するため、快楽を求め苦痛を避けるように振る舞う。少なくとも功利主義原理というのは、そのような人間像を想定して、それからの演繹の上に体系的な知を構想してみせた。しかしミルにとっては、こうした功利主義的人間を演繹の出発

12) この「人間の集団」の原語は、'masses of human beings' であるが、『論理学体系』の草稿においては 'the collective mind of our race' となっている。ミルはかつて「ベンサム論」の中でもこの 'collective mind of the human race' という言葉を用いて、大衆 (the masses) の社会と歴史との主体的関わりを問題にしていた (前掲拙著、172-180ページ参照)。そこでのカテゴリーが、この『論理学体系』ではこのようなところに使われているのは、興味を引くところである。

13) CW, VIII, p. 877 (『論理学体系』VI, 79-80ページ)

点に置くこと自体が問われていた。かってミルが「ペンサム論」で批判したペンサムの最大の欠陥は、ペンサムがこうした人間本性を固定的なものとして、その上にかれの倫理学あるいは政治学の体系を打ち立てようとしたことにあった。だからミルは、それほど安易にかれの演繹科学の起源に置かれるべき人間あるいは人間本性を決めることはできない。ミルから見ると、人間あるいは人間本性というものは、場所や時間とともに変化していくようなものとして構成されねばならなかった。しかも、にもかかわらず、それが演繹科学の起源に置かれねばならなかった。ここにかれの方法論の困難さがある。時間とともに変化していくものを演繹の起源におき、そこから論理的な体系を組み立てることは、一般論としてみた場合でも、極めて困難な作業といわねばならない。

ミルの場合には、彼は確かに、人間本性という社会科学にとっての演繹の起源を形づくるものを、先験的な方法で規定しようとはしていない。かといって、純粹に経験的な方法でそれを規定しているわけでもない。かれの方法は、あくまでもそれら両者の中間である。社会科学で扱うような事象は、たんなる自然現象などとは異なり、意識を持った人間の行為の結果である。その意味では、それらを自然現象のように厳密に規定していくことは困難である。しかし、たとえ一人一人の行動の一番奥底にあってその行動を規定しているものをこそ厳密には知りえないとしても、そこに現われる種々の現象・行動を帰納的にたどっていくなら、そこには一定の科学的検証に耐えうる法則——人間の行動に関する法則——を得ることは可能だろう。そしてミルは、これを人間本性に関する科学と呼ぶ。この科学は、いわゆる精密科学とは異なるが、しかし徐々に精密になっていくはずの科学であり、ミルによるなら、潮汐学にも例えられるような性質の科学であった。

潮汐学の例で考えるなら、潮の干満を引き起こす最大の原因が太陽と月の引力であることは科学的に知られている。しかし、実際の海岸や入江でどのくらいの潮位の変化が生じるのかということについては、それを厳密に予想したりすることはできない。ある特定の地点を取ってみれば、そこでの入江や海岸線

の状態や海底の状態、その上、気圧や風もそこでの実際の潮位を決定する要因としては挙げられねばならない。しかし、これらの種々の要因が生み出す結果を無視できないにしても、そこで一番大きな力を働かせているのは、やはり月と太陽の引力だろう。そしてミルは、この潮汐学と同様に、人間の行動、あるいはもっと広く精神現象全体をとっても、それらをつぶさに検討してみるなら、それらを結果させる最大の原因は、諸個人の特殊な条件の中にあるのではなく、ヨリ一般的に人間本性の中にあるとすることが可能だと考える。しかし、勿論、このように言ったからといって、この人間本性が何であるかということについては、この段階では何も言うことはできない。ただ、人間本性と呼んでもよいような何かあるものがあるはずだと言えるにすぎない。ミルの言葉で示せば、以下のようになる。「人間の予知と統御とがそこにおいて最も必要なこれらの結果の多くは、潮汐学の場合と同じく、部分的原因の総体によって決定されるよりも、比較にならないほど大きな程度で、一般的原因によって決定されている。また、これらの結果は、その大体においては、すべての人間、少なくとも大多数の人間に共通な環境や性質に依存し、僅かの程度だけ個人の心身組織の特異性や個人の特異な経歴に依存している。それゆえに、このようなすべての結果に関しては、殆どいつも検証することの可能な予知を企て、殆どいつも真である一般的命題を設定することができるのは明瞭である。人類の大多数、またはある国民、もしくはある階級の大多数が、どんな風に思考し感じまたは行動するかを知るだけで十分であるような時には、これらの命題は普遍的命題と同一の価値を持っている。政治学や社会科学の目指す目的にとっては、これで十分である」¹⁴⁾。

先にも触れたように、ここでの普遍的命題について、ミルがその時点でそれを十分に叙述できると考えていたわけではない。潮汐学にしても、満月や新月のときに潮の干満が大きいということは、おそらく遙か以前から経験的に知られていたことだろう。しかしそれを月と太陽の引力から説明できるようになる

14) CW, VIII, p. 847 (『論理学体系』VI, 30ページ)

までには、長い年月が必要だった。人間本性の科学についても同様のことが言える。経験的には、人間の行動や精神現象について、そこになんらかの法則を見出すことは、比較的容易だろう。問題なのは、それらの法則性を説明する普遍的命題——人間本性に関する普遍的命題——を探し出すことである。そしてこれは同時に、種々の経験的事象に対する「意味」の吟味という課題を担うものでもあった。コントの場合、彼は、あくまでも経験的事実の連関を叙述することをもって、科学的認識と考えていた。だから彼にとっては、昼があるから夜があるし、夜があるから昼があるというような、経験的法則がすべてだった。しかしミルはあくまでも、その中にそうした経験的法則を支えている因果関係を探し求めている。

ミルは、単なる経験的法則とは区別される因果法則を求めて、この心理学——人間本性に関わる科学——の領域へと入ってきた。しかしそこでミルが試みたことは、人間本性そのものを実証的に規定するのではなく、どちらかと言えば、人間本性と呼ばれる何かあるものが存在することを、「実証的」に検証することの方に重きが置かれていた。しかしミルは、この人間本性なるものが、実証的に構成できないと考えていたわけではない。潮汐学における太陽と月の引力の発見のように、心理学においても人間本性そのものが実証的に発見されることを、彼は否定していない。ただ、今はまだそれが部分的にしか発見されておらず、完全に発見されるころまでは至っていないだけであった。しかも、部分的だからといって全く無意味というわけでもない。例えば、経済学という社会科学の一特殊部門は、この部分的に発見された人間本性——功利主義の原理——の上に演繹されているのは周知のとうりである。そしてミル以降の実証的知の発展は、人間本性をヨリ一層厳密に経験的に規定していくことによって、その言葉が持っていた「意味」の領域さえも実証化してしまったとも言えるだろう。

ミルが人間本性に対して、一方では極めて実証的な接近でその存在を検証しながら、他方ではそれを最後まで規定することをせず曖昧に残したことの

なかに、ミルの積極的主張を読むことも可能である。当時の社会状況を考えてみるなら、社会全体が経済的合理性で一元的に構成され、そこでの諸個人も功利主義の人間として一元化されつつあったと考えられる。ミル自身、「文明論」以来、そうした情況を度々指摘していた¹⁵⁾。とするなら、人間本性を実証的に構成することは、あながち困難ではない。にもかかわらず、ミルがその入口で意識的に禁欲したことは、そこにこそかれの積極的主張が読まれるべきものだとも言える。少なくともこうしたミルの方法によって、経験法則がそこから導きだされるはずの始源の部分は、いわばカッコにくくられて、この法則の前に置かれることになる。にもかかわらず、そのカッコの中身は、人間本性であり、種々の実証的な経験法則を検証しその「意味」を問うべきものであった。この領域が、経験法則ではまだ到達しきれていない領域とされたことは、結果としては、実証的知の体系の自己確証の過程を、循環論法の陥穽から解放したが、しかしこの体系それ自身の「意味」確証過程は、未解決なまま先送りされざるをえなかった。この先送りされた「意味」確証の過程を担い、しかも社会科学の体系の実質的な始源の役割りを担わされたものが、ミルの「性格学」(Ethology)といえる¹⁶⁾。

ミルの『論理学体系』の中でこの「性格学」という科学が持たされている意味は、決して小さくない。にもかかわらずこれを明確に捉えることは極めて困難である。あえてそれを規定しようとするれば、人間本性の内で経験的に知りう

15) 1836年に出されたミルの「文明論」という評論は、当時進行しつつあった大衆社会化現象に対するきわめて鋭い文明批評という性格をもっている。そこでの人々は、自分の考えや行動をできるだけ世論の枠の中に合せていくように努力し、その結果、かつて持っていたような自然の中で生きるための活力を失っていくということが述べられている。勝田吉太郎氏は、この「文明論」にたいして、大衆社会とその文化的情況に関する鋭い洞察を含むもので、現代にも通用する力を持っていると述べておられる(勝田吉太郎『現代社会と自由の運命』「序章」参照)。

16) ミルは、「性格学」の説明において、ベーコンにならって、これは人倫科学の中間公理(axiomata media)だと述べている。しかし同時にベーコンにとっての中間公理というものが、経験的な諸現象から普遍的な命題へと帰納していく過程での「中間」公理であったことを批判し、ミルの「中間」公理とは、演繹の過程での「中間」公理だと述べていた(cf. CW, VIII, pp. 870-872)。確かにこれでも「中間」公理であるが、しかしミルの実際に行っていることというのは、いわば帰納と演繹の「中継」点をこの公理によって作ろうとしているようにも見える。

る領域、あるいは人間本性を実証的に構成して得られた領域と言ってもいいかもしれない。しかしミル自身は、この「性格学」を人間本性から演繹されるべきものと規定していた。「人間本性を作りあげている種々の要素についての一般的法則は、今日ではすでに十分に理解されているから、有能な思想家ならば、これらの法則から、かなり確実性に近い程度で、特殊の型の性格——これは人間では、一般に、ある仮定された一群の事情から形成される——を演繹することができる……。心理学の法則に基礎をもった性格学は、それゆえに可能である」¹⁷⁾。

この「性格学」という科学は、ミル自身も述べていることだが、それまでにはなかった科学であり、これから作られていかねばならないものであった。しかし、それが心理学から演繹されねばならないと述べられているにもかかわらず、この演繹の具体的プロセスは、ミルの中でも必ずしも明確ではない。にもかかわらず彼がこの科学の成立を主張しえたのは、上の演繹の過程と結果とを検証するための経験法則がすでに存在しているという認識によっていた。歴史的に考えても、種々の特殊な環境のもとで形成されてくる種々の特殊な人間本性の型つまり性格を知ることはできる。異なった時間と空間の中で生じてくる種々の環境の相違を、そこに見い出される特徴的な性格の相違と対応させることによって、種々の性格形成のプロセスを検証することは可能になる。と同時に、人間本性の法則に逆らうような性格形成のプロセスが、それを引き起こした環境への批判を行なうための基準として設定されることになる。

確かにミルの「性格学」という科学の内容には曖昧な点が多く残されている。実際に、性格というカテゴリーと人間本性というそれとを、内容的に区別しようとするのが困難な点もまたある。現象と本質という理解も可能だろうが、こうした区別は論理的次元での違いにすぎない。しかし、にもかかわらずミルは「性格学」にこだわっていた。内容的にはその違いを確定しにくいにもかかわらず、それらを相異なるものとするのは、それぞれのカテゴリーが負わされている役

17) CW, VIII, p. 873 (『論理学体系』VI, 73ページ)

割り、すなわちミルの論理学の中で与えられている役割りが異なるからだと言える。しかし、このミルにとっての論理的必要性も、ミルの意図が実証的知の体系化の試みとのみ理解されると、性格というカテゴリーをわざわざ人間本性から演繹する必要性はなくなってしまう。ミルにとっての『論理学体系』の中での最大の課題を、実証的知に対する「意味」の問い直しというところで考えれば、上の二つのカテゴリーの相違は論理的に必要である。「性格学」が、社会科学研究の出発点に置かれるためには、それ自体が経験的・実証的に検証されうるものでなければならない。と同時にその社会科学というものの、その実証的知の「意味」が問われている以上は、この「性格学」は人間本性というメタな領域との結びつきが強調されねばならなかった。

しかしミルは、たとえどれだけ人間本性からの演繹を主張するにしても、この人間本性を先験的に与えられたものとしては、決して規定していなかった。ということは、彼の構想する社会科学における「意味」の問い直しという作業は、それほど容易なことではないことを知らせてくれる。何かある固定的な「意味」を基準にして、社会科学の領域を構成し直すのならまだ容易かもしれないが、ここでは勿論そのようなことは不可能である。「意味」の基準そのものが常に問い直され、更新され続けなければならない。だからミルは、人間本性から性格形成への演繹の過程と種々の性格から人間本性を検証する過程とを常に切り離せない一つの過程として構想していたとも言える。しかし、たとえ如何に巧みに構想しようと、ここにとどまるかぎり、循環論法に陥らないとは言えない。

ミルが社会科学の方法において「社会の状態」というカテゴリーを用意しているのは、この「意味」の確認を行なう場を確定しておこうという意図があったからであり、また「逆の演繹法」という方法は、その場の「意味」を歴史の中で検証していくための方法だったと言える。

III 逆の演繹法と社会の狀態

ミルは、たしかに社会科学というものを、単なる経験法則の体系化でしかないような実証的知の体系から解き放ち、それに「意味」を与えようと努力してきた。しかし「意味」の問題は、彼の人間本性という概念の曖昧さのために、依然として未解決のまま残されていた。これから試みられねばならないのは、この「意味」の問題を社会の在り方そのものから追っていくことともいえる。しかしここにおいても一つの困難さが待ちうけていた。社会と社会現象と社会現象と、それらは極めて複雑でしかも時々刻々変化していく対象である。演繹法だけでは、それらを捉えていくことは不可能である。例えば、ある一定の状況のもとで、人間本性に依拠した法則から得た一つの具体的で特殊な原因を想定し、それがどのような結果を生み出すのかと予想あるいは推論することは、論理的には可能かもしれない。しかし現実には決してそのようなことはありえないだろう。まだ歴史的にも単純であった時代ならば、あるいは予想されたものの近似的な結論ぐらひは可能だったかもしれないが、少なくともミルの時代にそのようなことを期待するのは無理である。しかもそこに生じた予想と結果との間の差は、推論の始源に問題があったのかそれともその現実化の過程に問題があったのか、それさえも確かめることが困難である。しかしそうなると演繹科学としての社会科学の存在する意味が問われることにさえなる。ミルも次ぎのように言っていた。「しかしながら、傾向に関してさえ、われわれがあらゆる社会に例外なく妥当する極めて多くの命題を、こういう仕方でも獲得できると想定することは誤りであろう。このような想定は、社会現象の極めて著しく変化する本性と整合しないし、これらの現象を変化させる事情（環境）が種々多様であることも合わない。事情は、二つの異なる社会において、また同一の社会の二つの異なる時期において、全然同一であることはなく、また大部分同一であることさえもない」¹⁸⁾。演繹的方法が有効なのは、時間や場所の変化

18) CW, VIII, pp. 898-899 (『論理学体系』VI, 118ページ)

があったとしても、その論証においては、そうした変化を無視できる場合のみだろう。しかし、ミルも指摘するように、彼が生活している現実を決してそのようにはなっていないかった。

この演繹法の限界を超えるために、ミルは、コントの「逆の演繹法」という方法に接近していった。「逆の演繹法」というのは、一言で言ってしまうと、先天的な推論の結果と後天的な観察の結果とが、本来なら果たすべき役割りを逆にしてしまっているような方法のことである。普通の演繹法の場合には、原因になるものを人間の法則に適う方法で演繹して或る一定の結果を予測する。次いで、その結果を経験的な観察によって、その原因へと帰納し、先の演繹の過程を検証していく。しかしこの「逆の演繹法」では、まず経験的な法則認識によって或る経験的な結論を予め獲得し、次ぎにそれを人間本性の法則からの演繹により検証していく。だからこの場合には、本来は推論の過程であるべき演繹の過程が、検証の過程へと逆転しているのである。

ミルにとって、確かに直接的演繹法の限界は十分自覚されていた。しかし、だからといって「逆の演繹法」にのみ依存するというわけでもなかった。今はそれについての詳述は避けるが、ミルが経済学の方法に関して構想するのは、基本的には直接的演繹法であった。ただその際ミルは、複雑で変動していく社会現象の中から、ある極めて限定された領域を切り取ってきて、その領域においてのみ成立する論理と限定して、経済学の方法を構想していた。そしてこれは、ミル自身の次ぎのような言葉の具体的な現われでもある。彼はこう言っている。「社会の演繹的科学は、ある原因の結果を普遍的な仕方では主張する定理を設定しようとはしないで、むしろ与えられた場合の事情に適当した定理をどのように作るかを教える。社会一般の法則を確定しようとはしないで、与えられた社会の現象をその社会の特殊な要素または材料から決定するための手段を確定しようとする」¹⁹⁾。ここでミルが言っていることは、彼の経済学の方法に関してなら、十分納得のいくところだろう。これは『論理学体系』に先立って

19) CW, VIII, pp. 899-900 (『論理学体系』VI, 120ページ)

書かれたミルの「経済学の定義と方法」²⁰⁾の中で述べられていた経済学の定義と完全に一致している。功利主義的な人間を前提とし、富の獲得と消費というところでのみ人間の行動を測っていくところに成立するとされるミルの経済学の定義は、確かに、上で述べられてきたような直接的演繹法で構成可能な領域と言える。

しかし、ミルがこの『論理学体系』で問題にしている社会科学は、経済学のみではない。というよりも、経済学に象徴されるような個別な社会科学に対する「意味」の限定あるいは「意味」の賦与・創造ということの方に重点がある。すなわち、ミルの目から見た場合、本来なら部分認識というところにとどまらねばならない個別科学——中でも経済学——が、その枠を越えてあたかも全体的認識の科学であるかのように振る舞っていることが批判されねばならなかった。だからこそミルは、社会科学一般を成立させる「社会の状態」というカテゴリーを用意し、そこでの「意味」を歴史の中へと求めざるをえなかったのである。勿論、経済学を部分認識の科学と規定することは、古典経済学の正統的な考えとは異なっている。にもかかわらずそのように規定し、しかも歴史に固有な意味を認めざるをえなかったところに、ミルにとっての問題の独自性を見ることができる。

ミルは、コントの「逆の演繹法」を評価したのは事実だが、しかしコントのそれを全面的に受け容れていたわけではない。それどころか両者は決定的なところで全く異なっていた。ミルから見た場合、コントは余りにも安易に歴史から一般的命題を引き出しすぎていた。歴史の流れの中で実証的傾向が強くなるのは否定できないものかもしれない。しかし、そのような命題が明証的に引き出されうるのは、西ヨーロッパのしかも限られた国々においてのみである。コントはそれを全く無視していた。コントが歴史の中に見ていたものは、一元化された世界史の時間であり、すべてがそれへと収斂していくべきものであった。

20) この論文の正式な題は、'On the Definition of Political Economy, and on the Method of Investigation on Proper to It' (1836) という長いものである。これについては、すでに、前掲拙著第7章で扱っているので、ここでは詳述は控えることにする。

その限りで歴史は科学であり、同時に真理でなければならなかった。コントが彼の「逆の演繹的」によって「検証」したのは、このような「意味」だったと言える。しかしこれは、ミルから見ると、フランスの特殊な歴史的時間を、コント自身の極めて現実的な考えで強引に世界史へと敷衍したものであり、決して認められるべきものではなかった²¹⁾。

ミルが、コントに対し、彼には社会静学への配慮が欠けていると批判したのは、上のようなコントの一元的な世界史的時間による歴史のドグマ化を批判し、そこから「意味」を救い出すことを意図したからだった。ミルにしてみれば、歴史の中に予め固定的な「意味」——これにしても現実の一部からの抽象によって得られたものにすぎない——を前提して、そこから現実を演繹するなどという方法は、避けられねばならなかった。しかし歴史の中に「意味」を求めていくといっても、それは容易なことではない。そしてミルが、それを求めるために用意したカテゴリーが「社会の状態」(state of society)であった。

ここでミルが言う「社会の状態」というのは、「すべての大きな社会的諸条件または社会的諸現象の、同時的な状態」²²⁾とも言われていた。そしてそこにミルが盛り込む社会的諸事実あるいは諸現象というものの中には、殆どすべてのものが含まれる。知識の程度、精神的・道徳的教養の程度、産業の状態と富とその分配の状態、あるいはそこに存在する種々の階級間の関係から、そこに見い出される趣味、性格、美的感覚、更には統治の形態や法律や習慣といったものまで、種々雑多なものが織り込まれている²³⁾。そしてこれらが互いに影響し合って「一つ」の状態を作りだしている。だからミルもこれについて「社会の各状態とは、身体的な枠組 (physical frame) における異なった体質あるいは異なった年齢」²⁴⁾のようなものと述べるのである。しかも、ミルにとって特徴的なのは、こうした「社会の状態」が、暗黙のうちに、その社会を形づく

21) cf. *CW*, X, pp. 324-325 (『コントと実証主義』123-124ページ参照)

22) *CW*, VIII, p. 911 (『論理学体系』VI, 141ページ)

23) cf. *CW*, VIII, pp. 911-912 (『論理学体系』VI, 141ページ)

24) *CW*, VIII, p. 912 (『論理学体系』VI, 142ページ)

っている種々の部分の consensus によって支えられているということである。ここにおいて、その社会の状態に対する「意味」の問いかけが可能になる。種々の社会的な諸現象や諸事実が、あたかも一つの有機体の或る情況のように、互いに共存し合いながら、しかも単に共存し合うだけではなく、それらの種々の要因がそこに固有な共存の斉一性 (Uniformity of Coexistence) を形成している状態、この共存の斉一性がそこでの成員の暗黙の consensus を得ている状態、これが、ミルの言う「社会の状態」だった。

ミルが言うところの社会静学というのは、この或る「社会の状態」における種々の事実や現象の共存の斉一性を説明することを意図するものだった。種々の事実や現象を、ある一定の因果連関の中に整理し、それらの共存の斉一性の法則性を解き明かすことが意図されていた。しかし、ミル自身、そこで発見される因果律が捉える法則性には限定を与えていた。或る「社会の状態」における諸事実や諸現象の共存の斉一性を決定する要因が、その当該の「社会の状態」の中だけでは見出しにくくなってきているというのが、その理由である。ミルにしてみれば、或る「社会の状態」における諸事実や諸現象は、そこでの因果関係によって規定されるよりも、その「社会の状態」に先行する他の「社会の状態」によって、ヨリ大きく規定されることが多いことを認めざるを得なくなったということである。「社会の各状態における、そこでの異なった要素間に存する相互の相関関係は、社会のある状態と他の状態との間の継起関係を支配する法則から導かれた派生的 (derivative) 法則である。なんとなれば、社会の各状態の近接原因は、その状態に直接に先行している社会状態だからである。それゆえに社会科学の根本問題は、社会のある状態が、これに継起して起こってそれにとって代わる状態を生ずるための法則を発見することである」²⁵⁾。

上の引用文の中で、ミルが社会科学の根本問題として上げているものは、社会動学というように呼ぶことができる。ある社会の状態から他の社会の状態へ

25) CW, VIII, p. 912 (『論理学体系』VI, 142-143ページ)

と移行していくに際しての法則の発見、言い換えれば継起の斉一性についての法則的認識、ミルにとっては、これこそが社会科学の根本問題であり、それから派生してくるものとして、共存の斉一性への法則的認識が考えられていた。しかし、共存の斉一性といひあるいは継起の斉一性といひ、それら斉一性が認められるのは、まさに社会の身体的枠組 (physical frame) の内部においてである。あるいは、この枠組を成立させているのが、それらの斉一性だと言ってもよい。社会の或る状態から次ぎの状態へ、そして更に次ぎの状態へと続いていく歴史の中で、この「社会」はまさに身体的枠組として維持されてきた。とするなら、社会科学の始源を判断する「意味」は、まさにこの「社会」の中に求められなければならない。「逆の演繹法」による検証のプロセスは、ここで得られた「意味」を担う人間本性からの演繹によって初めて、真の検証のプロセスになるはずである。

ミルは、すでに「コールリッジ論」においても、啓蒙主義的思想家への批判として、彼らが「社会」の必要条件、言い換えれば「社会」が「社会」として存在する「意味」について何ら考慮を払っていないと、批判していた。この『論理学体系』においても、ミルはその「コールリッジ論」での主張を繰り返して述べている²⁶⁾。社会科学が、そこで得られた「社会」の統合のための必要条件をもとにして、すなわちそこでの「意味」に基づいて展開されるとき、それは初めて科学的「真理」に到達することが可能になる。ミルは次ぎのように言う。「社会静学のもたらした主要な成果の一つは、安定した政治的統合体の必

26) ミルは、『論理学体系』第6部第10章「逆の演繹法、すなわち歴史的方法」のなかで、かつて「コールリッジ論」で述べたことを、多少の字句修正はしているものの、そっくり引用している (CW, VIII, pp. 921-924)。私もかつて、「コールリッジ論」のこの部分を引用した (前掲拙著、第6章) ことがあるので、ここでは引用は差し控えたが、ここで言われていることは、色々な意味で示唆的である。かつてスマスは、労働の分割から「社会」を演繹してみせた。しかしそこでの「社会」というのは、必ずしもそれ自身の枠組あるいは境界というものについて自覚する必要のない社会であった。その「社会」そのものにとって、この枠組とか規範というものは、あたかも無関心な領域であるかのように構成されていた。しかし、ここミルの中では、その論理構成は全く異なっている。社会の枠組あるいは秩序というものから、「社会」の内部の意味への問い返しの方に大きな比重があるように見える。そして、ここでこのこうした問題の立て方は、現代の社会学の方法とも、相通ずるところをもってのように思える。

要条件を確かめたことである。あらゆる社会において例外なく発見され、かつ社会の統合が最も完全な処で最大の程度で発見されるために、国家と呼ばれる複雑な現象の存在の条件と考えることのできる（心理学的ならびに性格学的法則がこの推定を確証するとき）ある事情がある。……社会の異なる形態と異なる状態とを比較することによって得られたこれらの成果は、それ自体においてはただ経験的法則となるにすぎないけれども、その或るものはいったん示唆されるときには、人間本性の一般的法則から大きな確率によって導かれることが知られる。したがってこの二つの手続きの一致は evidence を proof にまで高め、一般化を科学的真理の地位にまで押し上げるのである」²⁷⁾。

ミルが求めていた社会科学の始源に置かれるべき人間本性の具体的内容は、こうして歴史の過程と共存の斉一性とを同時的に捉えることのできる「社会の状態」において漸く与えられたことになる。

む す び

ミルは、1848年に出版した『経済学原理』の「序文」の中で、アダム・スミスに対して非常に高い評価を与えていた。すなわち、スミスがその経済学を叙述するに際して、単に経済現象をそれとして叙述するのではなく、それを社会哲学の構想の中で叙述していたことへの高い評価であった。そしてミル自身も、このスミスの試みにならい、経済現象を当時の最良の社会的観念との関連の中で叙述することを目指していた。たしかにスミスにとっては、経済学を叙述することが、同時に「社会」を叙述していくことになっていた。というより、スミスの『国富論』によって初めて、「社会」というものが概念的に構成されたとさえ言える。

しかしミルにとっては、経済学を叙述していけばいく程——これは経済学を一層実証化していくことと同義的であるが——、「社会」というものが独自の概念として成立しなくなってきたという危機意識があった。これは、スミ

27) CW, VIII, p. 920 (『論理学体系』VI, 155-156ページ)

スによって生命を与えられた「社会」の崩壊を意味していた。ミルが「社会の状態」というカテゴリーを用意し、それを社会静学と社会動学という二つの方法によって構成しようと試みたのは、この崩壊しつつある「社会」概念の再構成を意図したからだろう。

ミルは、「社会」概念の再構成のために、社会科学の始源に人間本性を再度置き直し、それによって「社会」そのものを「意味」ある存在として再興することを意図していた。心理学を社会科学の前に置いたのもそのためだった。しかし、固定的あるいは先験的に人間本性を規定することを否定する以上、彼はそれを「社会」と「歴史」の中に求めざるをえなかった。そのため彼は「社会の状態」という論理的であると同時に歴史的でもあるカテゴリーを設定し、それへの静学的ならびに動学的研究を行なうことにより、「社会」というものの現われ方を捉え、その現われ方から「社会の意味」を捉えようとした。これは、人間本性を捉えるために「性格学」を設定した方法と同じである。そしてミルが、「社会」の必要条件として上げてくる市民としての教育制度の存在・社会という統一体を形づくっているものへの恭順の感情・同じ社会の成員の中での結合の力というのは、いわば「社会」という physical frame にとっての生命に該当すると言える。それゆえ、この「社会の状態」というものは、その「社会」の時と所を変えた現われ方と言うことができた。

ミルは、彼がこの「社会の状態」の中に求めていった歴史と人間本性との結合したもの、すなわち、彼にとっての社会科学の始源に置かれるべきもの、それをそこでの人々の「思弁的能力の状態」というように規定している。「歴史の証拠と人間本性の証拠とが合致の顕著な一例として結合するとき、社会の進歩を促す作動因の中で、このような有力な、殆ど至上の権力を持った社会的要素が実際に存在することが明らかとなる。これは人類の思弁的能力の状態である。その中には人類が自分自身に関して、また彼らを囲む世界に関して、彼らの到達した信念の本性をも含めている」²⁸⁾。

28) CW, VIII, p. 926 (『論理学体系』VI, 165ページ)

これが種々の「社会の状態」において、そこでの現実的な秩序を成り立たせている「意味」ということができる。そして同時にこれを基準にして、事実の過程は、それが真理であるかどうかを常に検証されねばならないことになる。かくしてミルの試みは、今漸く、社会科学の演繹の起源に到達したとすることができるだろう。

しかしこうしたミルの意図が成功したかどうかは不明である。「社会」を存続させるための必要条件によって、たしかに「社会」の physical frame は、それとして継続してきていることは言えるとしても、この physical frame それ自身が、「唯一」の形式として自己主張していく危険性については、ミルは果たして気付いていたのだろうか。physical frame として最も容易に表象されるものは、それは国家である。ミル自身は、あくまでも「社会の状態」という多種多様な要因によって構成される領域にこだわり、継起の斉一性と共存の斉一性のなかに、更には大衆あるいは集合的精神の consensus というもののなかに、「社会」の「意味」を追究しようとしていた。しかし、国家というものは、「社会」に対してその physical frame と同時にその「意味」さえも吹き込む力をもっていた。しかも国家というものは、たんに「というもの」というレベルに留まるようなものではけっしてない。具体的な現実の国家こそが、特殊現実的な「社会」に、その枠組と「意味」とを賦与しようとするのは当然である。たしかにミルにしても、ここで扱った著作の後も、執拗に『自由論』あるいは『功利主義論』といった著作のなかで、「社会」にとっての新しい「意味」づけの試みを続けていく。しかしその試みを無下に否定するつもりはないが、現実の歴史過程は、ミルの思惑とは反対に、新たなナショナリズムの時代へと進んでいったのも事実である。

以上、私は、ミルが社会科学を演繹的に構成していくに際して、彼がどのような方法でそこに「意味」の問題を入れていこうとしていたかを追ってきた。そこでの方法は、いわゆる経験主義的ではないにしても、たしかにきわめて経験論的な方法であった。経験的方法で「意味」の問題を考えようとする時の最

大限の努力を彼はしていたとも言える。しかし、方法としてはそのように言えるとしても、そこに構成された「意味」そのものについては、残念ながらここでは触れることができなかった。これについては、今後、国家論との関連で、考えていかねばならない。